

1 吾輩は猫である。名前はまだ無
 2 い。^{〔注〕}
 3 どこで生れたかとうと見当がつ
 4 かぬ。何でも薄暗いじめじめした
 5 所でニヤーニヤー泣いていた事だ
 6 けは記憶している。吾輩はここで
 7 始めて人間というものを見た。し
 8 かもあとで聞くとそれは書生とい
 9 う人間中で一番癡悪な種族であつ
 10 たそうだ。この書生というのは時
 11 々我々を捕えて煮て食うという話
 12 である。しかしその当時は何とい
 13 う考もなかつたから別段恐しいと
 14 も思わなかつた。ただ彼の掌に載
 15 せられてスーと持ち上げられた時
 16 何だかフワフワした感じがあつた
 17 ばかりである。掌の上で少し落ち
 18 ついて書生の顔を見たのがいわゆ
 19 る人間というものの見始である
 20 づ。この時妙なものだと思つた感
 21 じが今でも残っている。第一毛を
 22 もつて裝飾されべきはずの顔が
 23 つるつるしてまるで薬缶だ。その後
 24 猫にもだいが逢つたがこんな片輪
 25 には一度も出会わした事がない。
 26 のみならず顔の真中があまりに突
 27 起している。そうしてその穴の中
 28 から時々ぷうぷうと煙を吹く。ど
 29 うも咽せほくて実に弱つた。これ
 30 が人間の飲む煙草というものであ
 31 る事はようやくこの頃知つた。
 32 次第に楽になつてくる。苦しい
 33 のだかありがたいのだから見当がつ
 34 かない。水の中にいるのだから、座
 35 敷の上にいるのだから、判然しな
 36 い。どこにどうしていても差支え
 37 はない。ただ楽である。否楽その
 38 ものすらも感じ得ない。日月を切
 39 り落し、天地を粉塵して不可思議
 40 の太平に入る。吾輩は死ぬ。死ん
 41 でこの太平を得る。太平は死なな
 42 ければ得られぬ。南無阿弥陀仏南
 43 無阿弥陀仏。ありがたいありがた
 44 い。

〔注〕
 1 「夏目漱石全集」ちくま文庫、筑摩書
 房
 2 XSL-FOには、Endnoteを直接表現するた
 めの構造はない
 3 後注の下端は版面の下端に接する